

医療ルネサンス

No.5225

がん共生時代 機能を残す

3/5

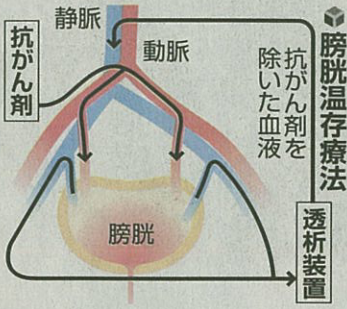
膀胱に高濃度抗がん剤

「膀胱を取るのとは勘弁してもらえませんか」

東京都のB男さん(75)は2010年12月、膀胱がんの経過を診てもらっていた主治医に訴えた。

頻尿が気になり、近くの泌尿器科クリニックを受診。粘膜にがんが広く散らばった上皮内がんというタイプ

の膀胱がんと診断され、結核予防に使うBCGワクチンを膀胱内に注入する薬物治療を受けた。しかし、再発し、がんは筋肉まで深く進行。主治医は膀胱



すべてを切除する手術が必要と説明した。

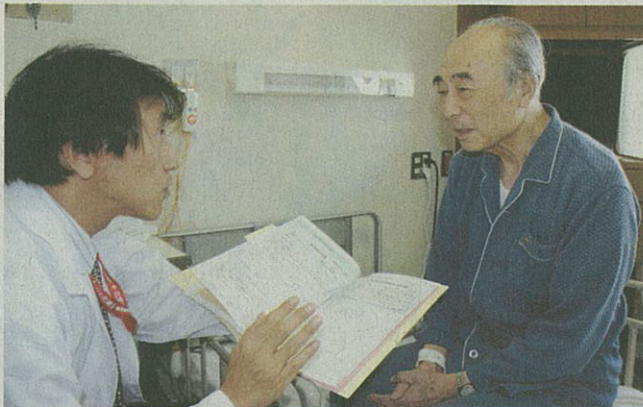
「血尿があったが、体調は悪くなかった。人工膀胱にするの気が進まず、手術を引き延ばしていた」(B男さん)

そんな時、膀胱を温存し、そのまま、高濃度の抗がん剤

を特殊な方法で注入する治療に大阪医大病院(大阪府高槻市)が取り組んでいることを知った。11年8月、主治医の紹介状を手に大阪

器科教授の東治人(あづまひと)さんは「膀胱全摘を避けられる可能性がある」と話した。

脚の付け根から動脈に特殊な細い管(カテーテル)を入れ、膀胱



入院治療中のB男さんに説明する東さん(左、大阪医大病院で)

廃物を取り除く時に用いる人工透析装置に通し、血中の抗がん剤を取り除く。

透析で90%以上は除去されるため、抗がん剤を高濃度で使うことができ、副作用は軽くすむ。約2時間の治療だ。抗がん剤治療の後計5週間は、週5回の放射線照射を行って、治療効果の上乗せを図る。

同大は15年前から100人以上を治療。転移のない患者では約9割が再発していない。11年7月に、入院費用など一部に保険がきく

国の高度医療に認められた。保険のきかない自己負担分は18万円だ。

B男さんは11月初めに退院。現在、体力回復のため、買い物などに積極的に外出するようにしている。

東教授は「この治療法は副作用が少ないため高齢者にも行える。全摘手術と比べた生存率や生活の質の違いを調べているところで、膀胱を取らずに治す新しい治療法として確立させたい」と話している。

膀胱から戻る静脈血を、腎臓病で血液の老

ご意見・情報を 〒104-8243 読売新聞東京本社医療情報部 FAX03(3217)1960 iryou@yomiuri.comへ

くらし 家庭



● 鶏のワインキノコソース (423kcal・塩分1.4g/1人)

【材料2人分】鶏もも肉(大)1枚/シメジ50g/生シイタケ4枚/赤ワイン/バター/生クリーム/固形スープのもと

【作り方】①鶏肉は半分に切り、塩、コショウ各少々をふって、小麦粉適量をまぶしておく②シメジは小房に分ける。生シイタケは薄切りにする③フライパンにバター大さじ1/2杯を熱し

て鶏肉を入れ、中火で両面をこんがり焼き、取り出す④③のフライパンに、再度バター大さじ1/2杯を熱し、②のキノコを加えていためる。赤ワイン1/2カップと、固形スープのもと1/2個を砕いて加え、1分ほど煮る⑤④に鶏肉を戻し入れ、塩小さじ1/4杯、コショウ少々で味を調える。鶏肉に火が通るまで弱火で2~3分煮て、鶏肉だけ器に盛る⑥バター小さじ1/2杯と小麦粉同1杯を混ぜる⑦⑤のフライパンを弱火にかけ、中のキノコソースに⑥を溶き入れ、とろみを付ける。さらに生クリーム大さじ2杯を加え混ぜる。鶏肉にかける。

方もあります」。イチゴの先の

シリーズ

【がん共生時代】機能を残す(3)膀胱に高濃度抗がん剤

「膀胱を取るのには勘弁してもらえませんか」

東京都のB男さん(75)は2010年12月、膀胱がんの経過を診てもらっていた主治医に訴えた。

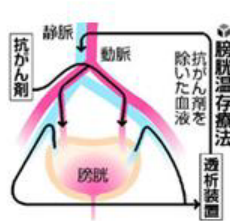
頻尿が気に入り、近くの泌尿器科クリニックを受診。粘膜がんが広く散らばった上皮内がんというタイプの膀胱がんと診断され、結核予防に使うBCGワクチンを膀胱内に注入する薬物治療を受けた。しかし、再発し、がんは筋肉まで深く進行。主治医は膀胱すべてを切除する手術が必要と説明した。

「血尿があったが、体調は悪くなかった。人工膀胱にするのは気が進まず、手術を引き延ばしていた」(B男さん)

そんな時、膀胱を温存したまま、高濃度の抗がん剤を特殊な方法で注入する治療に大阪医大病院(大阪府高槻市)が取り組んでいることを知った。11年8月、主治医の紹介状を手に大阪に向かった。診察した泌尿器科教授の東治人^{あづま ひとし}さんは「膀胱全摘を避けられる可能性がある」と話した。



入院治療中のB男さんに説明する東さん(左、大阪医大病院で)



脚の付け根から動脈に特殊な細い管(カテーテル)を入れ、膀胱以外の方向の血流を止めながら抗がん剤(シスプラチン)を注入する。抗がん剤を含んだ血液が全身に回らないよう、膀胱から戻る静脈血を、腎臓病で血液の老廃物を取り除く時に用いる人工透析装置に通し、血中の抗がん剤を取り除く。

透析で90%以上は除去されるため、抗がん剤を高濃度で使うことができ、副作用は軽くすむ。約2時間の治療だ。抗がん剤治療の前後計5週間は、週5回の放射線照射を行って、治療効果の上乗せを図る。

同大は15年前から100人以上を治療。転移のない患者では約9割が再発していない。11年7月に、入院費用など一部が保険がきく国の高度医療に認められた。保険のきかない自己負担分は18万円だ。

B男さんは11月初めに退院。現在、体力回復のため、買い物などに積極的に外出するようしている。

東教授は「この治療法は副作用が少なく、ため高齢者にも行える。全摘手術と比べた生存率や生活の質の違いを調べているところで、膀胱を取らずに治す新しい治療法として確立させたい」と話している。

(2011年12月14日 読売新聞)